

ヘーゲル『論理の学』における真なる無限性の概念

竹 村 喜 一 郎

はじめに

ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831) はその著『論理の学』(Wissenschaft der Logik, 1812/13/16) の第一巻「存在」の第一篇「規定態(質)」の第二章「定在」において、「有限性は自己を超え出る運動として存在する。したがって有限性の中には無限性、すなわち有限性自身の他者が含まれている」(GW11, 82) と述べている。周知のようにヘーゲルはここでいわゆる「悪無限性 *die schlechte Unendlichkeit*」と異なる「真無限性 *die wahre Unendlichkeit*」の存在を主張している。ところでこの主張に対してはさまざまな論評が加えられている。真無限性の概念に関してニコライ・ハルトマンは「ヘーゲル論理学のハイライト」¹⁾と評価したが、モイレンは、ギリシア以来の世界の全体性に関する思考の更新ではあれ、現代の自然科学における無限性理解とは背馳するものと断定している²⁾。

このような評価の分立は、ヘーゲルの無限性概念の再検討を機縁づけるものであるが、そうした作業を試みる際の一つの通路として、本論ではヘーゲルの論理学における定在論の具体的境位の確定を試みる。それというのも、単なる概念の次元でヘーゲルの無限性の取り扱いを論じてもその現実的含意が明確にならないからである。その際更にヘーゲルの議論の具体的準位を確定するために、シェリングの自然哲学との関連を検討する。そうする理由は、『近世哲学史講義』におけるシェリングの次の発言に存する。「したがってヘーゲルが彼の眼前に

見出した学問の純粋な論理的本性と意義を見抜いた勘を、ひとがいかにか手柄と評価しようとも、そして特に先行哲学によって実在的なものの中につつま隠されてきた論理的関係をまさにそのものとして彼が掘り出したことがいかにか大きな功績であるとしても、現実には遂行された形では彼の哲学が（まさに客観的・実在的意義の僭称によって）先行哲学よりも一段と怪物性を増してきたということを、またそこからして私がこの哲学を一つのエピソードと名づけたことが、決して不当ではなかったということ、人々は承認しなくてはならない（SW10.128）。ここでシェリングが主張していることは、ヘーゲルの論理学はシェリング自身が展開した自然哲学に含まれる論理的本性と意義あるいは論理関係をそれ自身として取り出したものにすぎない、ということである。ヘーゲルの最初の論理学構想は、シェリングの前期の自然哲学を基盤とするという見解もあるので、ヘーゲルの『論理の学』の内容とシェリングの自然哲学との関連の検討は不可欠なのである。こうした視角から、以下ではヘーゲルとシェリングにおける(1)質、(2)無限性、(3)空間と時間、の把握について検討を試みる。

一 質の規定展開とその哲学的意義

一般的に「もの」と称されるものは、質と量という一組の規定を有する、とふつうの意識には思念される。しかし、その両者をそれぞれどう捉えるか、また両者の関係をどう把握するかは、哲学上の固有の問題である。ここでは、まず『論理の学』におけるヘーゲルの質の規定の捉え方を確認し、次にその特性を考量し、更にシェリングの質の規定の仕方を検討する。

(一) ヘーゲルにおける質の規定

ヘーゲルにおいて質の規定は『論理の学』の「定在 *Dasein*」章において扱われているが、「A定在そのもの」のカテゴリー展開は次のようになされている。

(1) まず定在は「存在と無との単一な一つであること」(GW11.59)であり、この単一性のゆえに「直接的なものという形式」(ibid.)を持つ。こうした規定は存在と無の動的統一が成 *Werden* であるのに対し、両者の「静止的統一」(GW11.57) が成と区別され、これが定在とされるからである。

(2) だが定在が存在と無あるいは非存在との統一であることは、定在が存在としてだけ存在と無との統一であるだけでなく、無あるいは非存在としても存在と無との統一でもあることを意味し、この面からみた場合、定在は「非存在的な定在 Nichtseyendes Dasein」、すなわち非定在 Nichtdasein」(GW11.60)となる。非定在はそれ自身存在である」とによって「存在的な非定在 Seyendes Nichtdasein」(ebd.)であるが、これは「非定在としての定在」すなわち定在の「他在 Anderssein」(ebd.)である。ヘーゲルはこうして定在を自己に端的に等しくないもの、すなわち他在に移行したものとし、この他在を「関係としての無」(GW11.61)と規定する。この規定は、自己同等性という自己関係の不成立を意味している、と解される。だが定在はその非定在あるいは他者の中で自己を維持することによって、他在は定在の中に含まれると同時に定在からも分たれてもいることになり、定在は「向他存在 Sein-für-Anderes」(GW11.62)と規定される。ヘーゲルはこの向他存在に対して定在の自己との相等性としての存在を「即自存在 Ansichsein」(ebd.)と名づけ、即自存在を向他存在に依存するものとしている。更に彼は向他存在と即自存在を定在の二つの契機とし、両者の関係を「それらのおの自身の自身から区別された契機をも同時にそれのものに含んでいる」(ebd.)と説明している。そしてこのような即自存在と向他存在との統一をヘーゲルは「反省された定在」「实在性 Realität」(GW11.63)と名づける。このような实在性の把握は、实在性を単に完全性として否定を含まない肯定的なものとする伝統的实在性理解とは異なるものであり、ヘーゲル自身このことを意識的に企てたとと言える (vgl. GW11.64)。

(3) 以上の实在性の規定を備えた定在をヘーゲルは「自己内存在 In-sichsein」「定在するもの Daseiendes」「或るもの Etwas」(GW11.66)と規定する。ヘーゲルは「或るもの」が更により詳しく向自存在、物、実体、主観等々として規定されることになるにせよ、これらの根底に存するものとして「否定的統一」(ebd.)を挙げているように、通常自己同一的とみなされるものの根底に否定的なものを見るのがヘーゲルの存在了解の根源的視角であり、それは同時にまたヘーゲルの思索の固有性を成すものでもある。

ヘーゲルは「B規定態」においてもカテゴリーの展開をカテゴリーの運動の自覚化の過程として描写している。

(1) 或るものは他者の非存在あるいはあるものの他在が終わることとして「限界」(GW11.68)を持つ。だがこの限界は或るものとしての他者にとっても限界であることによって、限界は両者がそこで終わっている「中間者」(ebd.)である。しかし、限界が更に進んだ意味を持つことをヘーゲルは次のように言う。「けれども、或るものの自己同等性は、その否定的本性に基づいている」(GW11.69)。つまり限界と

いう非存在はむしろ或るものの「根拠」(ebd.)であり、或るものをそれであらしめるもの、すなわち「規定態Bestimmtheit」(ebd.)である。

(2) 或るものは規定されたものとして「規定態との単一な直接的統一」(GW11.70)のうちにある。ここでもヘーゲルは直接的統一が二つの意味を有することを開示する。すなわち、規定態は、一方では「自己へと還帰した限界」(ebd.)であり、他方では「向他存在へと移行してしまった、あるいは限界としてあるところの自己内存在」(ebd.)である。ヘーゲルは前者を「規定Bestimmung」(ebd.)と名づけ、それによってもたらされる事態を「或るものは、その規定においてはそれが在るべきところのものである」(ebd.)と説明している。つまり規定は或るものの本質性を指す。それに対してヘーゲルは限界あるいは向他存在としてある規定態を「性状Beschaffenheit」(ebd.)と命名する。それは或るものの外的定在であり、「外的な影響と関係のうちにあるもの」(ebd.)である。ヘーゲルはこのような規定および性状を自己のうちに合一しているものとして「質Qualität」(GW11.71)を定立する。したがって質は、「他者への関係によって自己を規定する仕方をそのうちにもっているかぎりでの、或るものの本性」(ebd.)と捉えられるのである。このような質の捉え方は、或るものが変化し、質が固定的ではないという事態の即事的論理化という意味を有していると見なさう。

(3) ヘーゲルによれば、変化は、定在が存在と無との統一、すなわち成であるかぎり、定在のうちにあるが、或るものの変化はさしあたり「他者に向かって開かれた側面」(GW11.73)、性状においてのみおこる。とはいえ、或るものはその性状の変化の中で維持される。その際或るものの規定をなし、その非存在と規定されている限界をヘーゲルは「制限Schranke」(GW11.73)と定義づける。また制限としての自己への関係における規定の即自存在は「当為Sollen」(ebd.)と規定される。或るものが変化するということは、或るものが当為として制限としての自己自身を超えて他の或るものになることを意味するが、或るものが制限を超えることが当為であり、或るものは当為としてのみ制限を持つことになる。ここでヘーゲルは或るものの本来的在り方を静止的自己同一性ではなく、当為に基づく自己否定的変化に求めている。更にヘーゲルは制限と当為の統一を「否定Negation」(GW11.76)と捉え返す。まず「或るものが欠けていることとしての欠如、あるものは制限」(GW11.77)は「否定」である。また「当為は即自存在としての規定態または否定である」(ebd.)。この否定は非存在、制限としての第一の否定の否定として、「否定の否定」「絶対的否定」と規定される。ここから更に、ヘーゲルは否定を「実在的なもの」として次

のように言う。「この否定態こそが、他在を揚棄する運動として自己へと還帰する単一なものを成すのであり、あらゆる哲学的理念と思弁的思考一般との抽象的基礎である」(abg)。ここで強調されているように、否定の働きをヘーゲルは重視することを通じて事物に内在する運動を対自化するものであり、否定こそヘーゲル哲学の原動力と言えるのである。

以上は、『論理の学』本文の確認にすぎないが、その意味を別の視角から検討しよう。

(二) ヘーゲル質論の固有相

古来哲学的議論の中心問題として真の存在が問われ、それに実体という名称が与えられ、実体が個別的本質とされた場合、それを構成する偶有性が性質あるいは質と等置されてきた。同時に質は量と並ぶ存在者の規定性とされ、いずれを優位に置くかは哲学の性格によって決定される。³ヘーゲルにおいても質が性質として把握されていることは、「質は、それが外的関係の中で自己を内在的規定として示すかぎり、主として性質Eigenschaftである」(GW11.71)とされていることから明らかである。またヘーゲルが質と量を区別し、質が事物にとつて第一義的意味を有するものと見ていることは、「質は最初の直接的な規定態であり、量は存在に無関的になつている規定態である」(GW11.111)という記述から確認される。問題はそうした質把握をどう評価するか、ということである。とりあえず言えば、ヘーゲルの質の規定の仕方が、よく知られているアリストテレスおよびカントのそれと異なることは、「質」のカテゴリーそのものが「規定」および「性⁴状」のカテゴリーの展開後をはじめ取り挙げられているところに見うる(vgl. GW11.71)。そのようなヘーゲルのカテゴリー展開の仕方そのものを特徴づけるなら、それを先験主義的關係主義と規定することができる。

まずヘーゲルのカテゴリー展開が、先験主義的であることは、ヘーゲル自身「論理学の一般的区分について」において「客観的論理学は、その内容からいって、部分的にはカントのもとで先験的論理学と呼ばれているものに対応するであろう」(GW11.31)と言明していることから首肯される。改めて確認するまでもなく、カントは「純粹理性批判」(Kritik der reinen Vernunft, 1. Aufl. 1781, 2. Aufl. 1787)において、「一般論理学と区別して「認識の起源、範囲及び客観的妥当性を規定する学」を先験的論理学と名づけている⁴。ヘーゲルの場合、存在論および本質論を包括する客観的論理学の内部において、経験に先行するという意味での先験性が重視されていることは、特にこの「定在」章にお

いて、定在一般から定在するもの、更に規定態へと展開がなされているところに見うるのである。

またヘーゲルが存在了解として個々の事物の自存性を原理とする実体主義ではなく、関係項に先立つ関係を第一とする関係主義に定位し、これをカテゴリーの次元でも堅持していることは、典型的には実在性に関して、「即自存在」と「向他存在」とが挙げられ、「この両契機は実在性のもので異なつた側面、すなわち反省諸規定をなしており、これらの側面すなわち反省規定は相互に無関心的である」(GWL166)と言われていることから確認できる。反省諸規定は、光の反射のように自己から出て相手に衝突して自己へ帰つて来る運動の中で成立する規定であり、自他ともに相手なしにはありえないものである。だが反省諸規定は元来相互に他を前提するものでありながら、自己を自立的なものと錯認することがあり、そうした場合無関心的と規定されるのである。ともかく反省諸規定は本質論だけでなく、存在論の基底にも据えられているのであり、ヘーゲルのカテゴリー展開の基軸を成しているのである。

それではこのようなカテゴリー構成の視点は如何なる成果を産出したと言えるのか。一つの指標としてカントの質の規定をとるなら、同じ先験性の重視といつても、ヘーゲルのカテゴリー展開が徹底かつ透徹したものであることは直ちに判明する。すなわちカントにおいて彼がいうカテゴリーとしての純粹悟性概念は周知の如く判断における悟性の論理的機能から導出されている。カントは判断における質の内容を肯定的・否定的・無限的の三つとし、そこから質のカテゴリーとして実在性・否定性・制限性を導出している。そしてこれらのカテゴリーの実質的機能は次のように与えられている。「実在性は、純粹悟性概念においては、感覚一般に対応するものである。したがつてその概念自身が存在(時間における)を示している。否定性は、その概念が非存在(時間における)を表すものである。したがつて両者の対立は、同じ時間の、充たされた時間かそれとも空虚な時間かという区別によつて生ずる」⁶⁾。ここに明らかかなように、カントにおけるカテゴリーは、実際は経験を基準に導出されている。具体的にカテゴリーと対象との関係は次のように規定されている。「実在性とは或るものであり、否定性とは無、すなわち対象を欠く概念、たとえば影、寒気のようなものである」⁷⁾。このような規定は明解とは言えない。このような文脈において制限性がどのように規定されるかと言えば、「制限性は実在性が否定性と結合されたものにはかならない」と言われるように、第一のカテゴリーと第二のカテゴリーとの結合から生ずるものとされている。このようにカントにおける質のカテゴリーの展開は外在的かつ形式的でしかなく、きわめて貧弱である。その理由はカントが質を感覚の性質に限定したことと否定を単なる無としか把握しえなかつたこ

とにある。カントが質を経験に与えられる感覺的性質に限定する傾向があることは、次のような記述に読み取ることができる。「我々が量一般について先天的に認識できるのは、単に唯一なる質、すなわち連続性のみであるが、しかしあらゆる質（現象の實在的なもの）については、質の有する内包的量、すなわちすべての質が或る度を有するということだけを先天的に認識することができるのみである」¹⁰。要するにカントによれば、感覺の質は經驗的であつて先天的に表象することは不可能なのである。もう一つ質の把握に関連する事柄として、カントにとつて否定は無でしかなく、客観性を構成しないものである。こうした見地をカントは無の四つの形態、すなわち(1)対象のない空虚な概念としての無(ens rationis) (2)概念に対する空虚な対象としての無(nihil privativum)、(3)対象のない空虚な直観としての無(ens imaginariū)、概念のない空虚な対象としての無(nihil negativum)を挙げながら、實在性に対する否定性を(2)の nihil privativum とし、その客観性を否認している。¹¹ 無を分類することの意義はともかく、その把握が静止的であることは否めない。翻つてヘーゲルのカテゴリー展開が内在的かつ動的であり、その意味で即事象的ということができるのである。

(三) シェリングにおける質規定とその問題性

シェリングにおける質の把握は変遷を有する。まず『自然哲学の理念』(Ideen zu einer Philosophie der Natur, 1797)においては、対象が實在性を獲得するためには対象が質として感じられ、感受されなければならぬとされる。「しかし、實在性はただ感じられるだけであり、感覺の中にのみ存在する。だが感覺されるものは質と称される。したがつて客体は、概念の一般性から離れることによつてはじめて、質を獲得する。すなわち客体は量であることをやめるのである」(SW2.269f.)。このようにシェリングは質を感覺における實在性として捉え、それを更に感受を触発する力の規定された大きさ、すなわち、牽引力と反撥力という物質を構成する二つの根本力(vgl. SW2.229)の規定された関係と捉える。したがつて質は根本力の関係に還元される。「物質の一切の質は、唯一もつぱら物質の根本諸力の集中度にもとづく」(SW2.272)。シェリングが質の規定を定立する際主として念頭においていたものが化学的物質であつたことは、化学の諸原則の原理が次のように定式化されていることから確認される。「物体の一切の質は、物体の根本諸力の量的な(段階的な)比例関係に基づく」(SW2.317)。

このような質の把握には三つの特質ないし問題性が指摘される。その一つは、質の規定が質そのものの論理的規定として展開されるのではなく、質が量的関係に還元可能なものと捉えられていることである。第二の特質は、質が二つの根源力の比例関係であるなら、牽引と反撥がいわば相殺しあう点としての無差別点が考えられ、これに対して諸質は無差別点が一本の線上を左右へずれることとして提示されることになり、質は連続体として考えられることになることである。第三の特質は、このように質が連続体と捉えられるなら、事物の固有性としての質は現実性において把握されるのではなく、可能性としてしか把握されていないことである。このような質の捉え方は、『自然哲学体系の第一草案』(Erster Entwurf eines Systems der Naturphilosophie, 1799, 以下『第一草案』と略す)においては修正される。

『第一草案』においてシェリングは、「第一公理」において「無制約なものとは存在そのものである」(SW3.11)と声明したあと、この無制約なもの \parallel 存在そのものを「自然」(SW3.12) 更には「絶対的活動性 absolute Thätigkeit」(SW3.13)と規定している。続く「第二公理」としてシェリングは「絶対的活動性は有限な所産によってではなく、無限な所産によってのみ表現できる」(SW3.14)という主張を掲げ、これら二つの公理から自然哲学の原理として「自然は無制約的実在性を有する」(SW3.17)という命題を導出している。ここに表明されているのは、自然を根源的に絶対的な能動性、すなわち現象することのない能動性と捉える自然観である。そこで問題になるのは、自然がこのような能動性とどまることなく、現実の現象的自然としてあることをどのように説明するかということである。

これに対してシェリングは二つの定理によって答えようとする。「定理一 一般的自然活動性の最も根源的な抑止点は根源的質のうちを求めるべきである」(SW3.20)。シェリングは自然の現象化を「根源的質」に求めるのであり、したがって根源的質は「自然における無制約者の最も根源的な否定的表現」(SW3.22)とされ、そこで現実的に問題にされているのは物質の分割可能性である。シェリングは更に物質の分割可能性に二面あることを次のように言う。「物質の分割可能性が一面から見れば有限であるのは、他面から見れば無限であるからでなければならぬ」(ebd.)。このように有限性の根底に無限性を見る立場をシェリングは「力動的原子論の原理 Prinzip der dynamischen Atomistik」(ebd.)と名づけ、これによって生ずる個別的自然物を「自然モナド eine Naturmonade」(SW3.23)と称する。つまり絶対的活動性の阻害・固定化として一つの産物、一つの現示が「モナド」として得られるが、この産物は質的に限定されていなければならない。ここにシェリングの質に関する新しい規定が次のように展開される。「この質も特定度の一作用 eine Aktionであり、これによってその所産以外

の質料は存在しない」(SW324)。ここでシェリングは質を二つの根源力の比例関係とみる立場から、質が現象するための条件として、質に直接先行する現実、すなわち作用を見い出す。したがってシェリングによれば、「どの物質も作用の一定程度以外のなにもでもない」(SW326)。ここから「定理二」として「質は作用に等しい」(SW327)が導出される。更にここから物質の多様性に関する説明が次のようになされる。「自然所産のあらゆる差異性は、諸作用の異なる比率のみに起因しうる。自然の多様性は元素Ⅱ作用のうちのみ求めるべきである。物質は周くⅠであり、根源的な結合の比率のみが多である」(SW334f)。

ところでこの『第一草案』における質の概念は現実性の側での質を考えているが、しかしまたこのような質を既に前提してもいる。なぜなら自然哲学の課題として掲げられるのは「自然一般における力動的段階系列がアブリアオリに導出されるべきである」(SW369)という命題であるが、この段階系列そのものは現実的な質をもった自然産物を前提し、根源的三元性が自己展開して、一層複雑な非有機的諸形式、諸過程、諸体系になり、ついで有機的なそれらになり、究極的には性差という最高の有機的三元性となり、その内で同時に二元性および産出性として自己を反復することとして叙述されているからである(vgl. SW3239f)。そして質が諸作用の比率として捉えられることは、あくまでも質が比率という量的なものに還元可能なものとして定立されていることを意味する。このかぎり『自然哲学の理念』の基本的問題性は依然残存するのである。

そしてこのような量を優位に置く質把握の延長上に『私の哲学体系の叙述』(Darstellung meines Systems der Philosophie, 1801)で「量的差別 die quantitative Differenz」の概念が前面に立てられ、それが質の概念に取って代わっていることは、そこに「質」という規定が挙げられず、「主観的なものと客観的なものとの量的差別があらゆる有限性の根拠である」(SW413)と言われるところから明らかである。

ところでヘーゲルの質の規定が、シェリングの量に還元される質の把握に対する批判として展開されていることは、『論理の学』そのものに即するなら、必ずしも明確でないが、講義においては明示的である。すなわちヘーゲルはハイデルベルクでの「論理学と形而上学」講義において、「量的区別は単なる外面的区別である」と述べた後、「シェリングの哲学において絶対者が量的無差別と規定されていること」を「誤解」とし、その理由を区別されたものが独立したのではなく、揚棄されたもの、すなわち非独立的なものとしてあることに求めている¹³。ヘーゲルが目指したことは、質をあくまでそれ自身として論理的に規定することであった、と言える。このようにヘーゲルは、シェ

リングが言うようにシェリングの自然哲学の展開内容の論理化を試みたのではなく、シェリングの自然哲学そのものに対する根底的批判として自らの論理学を構築したと言えるのである。¹⁵

二 ヘーゲルの真無限の概念とその自然哲学的背景

ヘーゲルの真無限の概念を把握するためには、「論理の学」における叙述の検討に留まることなく、その背後にある自然哲学的立脚点およびその現代的意義を視野に収める必要がある。以下こうした作業を試みる。

(一) 無限性の真の概念

最初に「論理の学」「定在」章「C (質的) 無限性」における「無限性の真の概念」(GW1178)を確認してみよう。

通常有限性と無限性あるいは有限なものとは対立する概念と捉えられる。だがヘーゲルは有限なものが自分自身を揚棄する運動であり、それ自身無限であることを主張する。すなわち有限なものとは規定態を持ち、「制限としての非存在」(GW1178)が本性を成しているものであるにせよ、ヘーゲルによれば規定されたものが有限であるのは、当為においてのみである。既に確認したように、ヘーゲルは否定を制限と当為という二契機から成るものとする (vgl. GW1177)。有限なものは否定としての制限を有するものであるが、制限そのものが当為という制限の否定によって成立するものであるかぎり、有限なものは自己を否定するものを自己のうちに抱えていることになる。それゆえ制限と当為の関係は、「否定の自己自身への関係」(eod.)であり、ヘーゲルはそこに「有限なものの否定を揚棄する運動」(eod.)を見るのであり、次のように結論づけられる。「したがって、自己を超えてゆくこと、否定を否定して無限になるということは、一般に有限なものの本性である」(GW1179)。このように捉えられる無限なものは「理性概念」(eod.)と称される。

だが、このような無限なものはおよそ形式的規定にすぎない。有限なものが制限としての自己を超えても、ただちに無限なものとは言えないからである。そこでヘーゲルが問題にするのは有限なものとは無限なものとの交互規定という事態である。ヘーゲルによれば、有限な

ものは、定在のもとでの規定態としての否定を有するものであるが、それはその否定としての無限なものに對立し、「両者は相互關係のうちにある」(ebd.)。このように有限なものが無限なものに對立し、同じように無限なものが有限なものを自己の外に持っている場合の無限なものが「悪無限的なもの das schlecht-Unendliche または悟性の無限的なもの」(ebd.) と名づけられる。このように有限なものが無限なものへの關係において有限であり、無限なものがあるものへの關係において無限であるにすぎない事態が「交互規定 Wechselbestimmung」(GW11.81) と捉えられ、具体例として「無限進行 der Progreß ins Unendliche」(ebd.) が挙げられる。このようなヘーゲルの無限性把握の意義は有限性に対して置かれる通常の無限性概念を有限なものとして次のように明示したことである。「有限なものにつきまとわれたままであるこの無限進行という無限性は、それ自身のもとにそれの他者、すなわち有限なものをもっている。このことによつて、それは限界づけられており、それ自身が有限である」(ebd.)。このような悪無限性の限界把握の上に真の無限性に関する概念が定立されることになる。

ヘーゲルが真の無限性と規定するものは、有限性、無限性それぞれがそれぞれの他者を自己の内に含むことを確認することによつて自己と他者との同一性を把握することによつて成立するものとされている。すなわちヘーゲルによれば有限性は自己を超え出る運動としてのみ存在するので「無限性すなわち有限性自身の他者」(GW11.83) を含み、無限性も「有限なものを超え出てゆく運動、有限なものへの否定的關係としてのみ存在」、「したがつて本質的にそれの他者を含んでおり、またそれゆえにそれのものでそれ自身の他者である」(ebd.)。こうして有限なものも無限なものもそれ自身で真理態を持たず、各々はそれ自身のもとにおいてそれの他者との統一であることによつて両者の相互に對立しあっている規定態は消失している。ヘーゲルはここに「真の無限性」(ebd.) の出現を見るのであり、そこに存する事態を次のように捉える。「真の無限性は他在をこえてゆく運動のうちに自己自身への還帰として成立している。それは自己自身へ關係するものとしての否定である」(ebd.)。このように有限なものも無限なものとの統一、有限性と無限性がともに揚棄されていることがヘーゲルのいう真の無限性である。

しかし、このような真の無限性は無限性の形態としてどれだけ独自性を有するのかわきという疑問は残る。なぜなら悪無限性と規定されたものも有限性と無限性との統一態であるかぎり、事態的には真無限性とは同一のものであり、悪無限性と真無限性との差異は、有限性と無限性とを對立的に捉えるのか、統一的に捉えるのかという視点の違いに帰着するのかわきに見えるからである。だがこのように有限なもの

無限なるものを最初から前提し、両者が互いに他者を自己のうちを含むことによって規定が同一となるという形式的議論によってヘーゲルは真の無限性を論理化しているのではない。ヘーゲルによれば、有限なるものはその規定からして否定・他在・非存在を有する (vgl. ebd.)。だが有限なるものは、静止的に存在するのではなく、自己自身を揚棄する運動、すなわち否定あるいは他在としてあるから、それ自身においてそれの他者であり、「他在の他在、否定の否定としての自己」への還帰、自己自身への関係 (GW1182) なのである。このかぎりヘーゲルが言う真の無限性は、現実的には有限なるものの在り方の否定性という観点からする捉え返しにすぎないという消極的意義しか持たないとも言える。だが、同時にこの真の無限性という規定は、有限なるものという通例否定的にしか捉えられない現実的なものそのものの存立構造を解明するとともに、その固有の価値性を開示するという積極的意義を有していると言える。なぜなら、無限なるものと有限なるものが対立的に捉えられるかぎり、有限なるものには否定的意味しか与えられず、その存立様態も解明されることはないからである。だが有限なるもの自身その存立は、ヘーゲルが指摘したように否定の運動を介した自己自身への回帰、自己関係という構造を有しているのであり、それを真なる無限なるものと規定することは、座視されてきた有限なるものの構造の論理化として固有の意義を有するのである。

(二) 真なる無限性概念の自然哲学的背景

ここで更に顧られるべきは、真の無限性という概念の自然哲学的背景である。ヘーゲルは一八〇四年から一八〇五年にわたるイェナ大学での自然哲学講義の中で、次のように述べている。

「真に無限なるものとして直接に自己を開示するエーテル der Äther の諸モメントが空間と時間である。そしてこの無限そのものが運動であり、総体として諸領域あるいは諸運動の一つの体系である」 (GW7,193)。

ここで言われるエーテルは「絶対的質料」 (GW7,188) とも言い換えられているが、この内容およびそのモメントとしての空間と時間に関する言及はここでは省略することにして、真に無限なるものが運動とされていることに着目したい。ところで同じ自然哲学講義において運動は次のように規定されている。

「両者〔空間と時間〕の實在的な統一は、両者を自己内に分かれたものとして、また直接に分離することで自己自身を止揚するものとし

て持っている。この実在的な統一そのものは単純であり、エーテルの実在的な無限性である。「略」この実在的な無限性が運動である」(GW7.203)。

ここではより明確に空間と時間との実在的統一 \equiv エーテルの実在的な無限性 \equiv 運動という関連が述べられている。このように空間と時間との統一を運動とする観点が、後年の『エンツュクロペディ』初版(一八一七年)においても維持されていることは、「空間の時間への、そして時間の空間への移行および再産出が運動である」(GW13.122)という一文からも確認される。ともかくヘーゲルの真なる無限性の概念は、自然哲学的場面ではエーテルという絶対的質料の存在と結びつけて定式化され、後にはエーテルの存在は直接的に指示されることはなくなるにせよ、時間と空間との統一としての運動をモデルとして論理化されたことは明らかである。したがってヘーゲルにおける真なる無限性の概念を更に討究するためには、『論理の学』の解明という視点および枠内で、ヘーゲルの空間および時間了解が検討されなければならない。だがその課題に着手する前に、シェリングの無限性理解が考察されなければならない。

(三) シェリングにおける無限なるものの理解

シェリングにおいて有限なものとの関係は『自然哲学の理念』においては次のように捉えられている。「有限なものとの無限なものとの根源的に合一している場合には、無限なものから有限なものへの移行は生じない。そしてこの根源的合一は個別的自然の本質のうち以外どこにも存在しない」(SW2.37)。シェリングは、このように無限なものから有限なものへの移行を認めず、個別的な自然そのものを有限なものとの無限なものとの根源的合一と見なす。こうした有限なものとの無限なものとの関係把握は、端的に無制的なものとなる自然が如何にして個別的現象として現れるか、という問題およびそうした個別的現象そのものがどのような在り方をするのか、という問題と関連している。シェリングがこれらの問題に対した答えは「自然は見える精神であり、精神は見えない自然である」(SW2.56)という言葉で要約されている。すなわち自然は精神がそうであるように、自らの無制的な活動性を客観化し、そのように客観化された産物が有限なものである。かくしてあらゆる客観的なもの \equiv 有限なものは、自然 \equiv 精神の自己客観化という意義を与えられる。だがシェリングはこのような枠組を提示したにせよ、『自然哲学の理念』においても、『世界靈魂について』(Von der Weltseele, eine Hypothese der höheren Physik zur

Erklärung des allgemeinen Organismus, 1798) においても、直接的に無限なものとの存立様態について論じてははず、またこの枠組に即するかぎり、ヘーゲルが「論理の学」において展開しているような、有限なものとの運動の中に有限なものとの無限なものとの同一性を見い出すのではなく、有限なものとの無限なものとの同一性が直接的に前提されているにすぎない。

こうした事態は以後の展開においても変わらない。たしかに「自然哲学の第一草案」においては、先にみたように自然が「絶対的活動性」と捉えられ、精神との類似においてもではなく、自然そのものが根源的なものと定立され、「無限なものとの有限なものとのうちで表現する可能性が全ての学の最高の問題である」(SW3.14)と言われるように、有限なものとの無限なものとの関係が問題にされる。そしてそれに対するシェリングの対応は次のように表明される。「経験的に無限なものは、ただ絶対的な(知性的な)無限性の外的直観である。絶対的無限性の直観は根源的に我々のうちにあるが、絶対的無限性は、外的、経験的表現なしには、意識に達することはない。このことの証明は、無限性の直観は、経験的に無限な系列が想像力の前で否定されるときに、まさしく生ずることである」(ebd.)。

ここにはシェリング自身の主張としては二つの点が認められる。その一つは、「絶対的無限性」は、ここでは明示されていないにせよ、「知的直観」によって把握されるということである。知的直観が、シェリングにおいては、まず『哲学の原理としての自我について』(Vom Ich als Prinzip der Philosophie, oder über das Unbedingte im Menschen, 1795)において、無制約的なものとしての自我の存在の原理と思维の原理との同一性を捉える作用と規定されたことは、「私の自我は、思维されることにおいて存在し、存在するがゆえに思维される」(SW1.167)と自我における存在と思维との同一性が主張された上で、「自我は自己自身にとつては、単なる自我として、知的直観において規定される」(SW1.181)と自我の自己規定の作用と捉えられていることから明らかである。こうした知的直観は、『先験的観念論の体系』(System der transzendentalen Idealismus, 1800)においては、「自由の産物」、産出することと産出されたものが同一である」[知](SW3.369)と定式化されている。ともかく、シェリングによれば経験的直観とは異なる作用としての知的直観によって絶対的無限性は捉えられ、それは経験的直観によつては「無限な系列」(SW3.15)として意識されるということである。

ところで先の引用でシェリングが主張しているもう一つのこととは、絶対的活動性としての自然が「見かけの産物」としての個別的现象となるためには「絶対的活動性が無限に阻止されたものとして現出しなければならぬ」(SW3.16)ということであり、それ自身自然には「根

源的二元性」(eod)が存することを前提するというのである。シェリングによれば「根源的三元性は、その下でのみ無限なもの一般が有限的に呈示可能となる制約、すなわちそのもとで一つの自然が可能となる制約なのである」(eod)。シェリングにとって自然哲学の根本課題は「自然における力動的段階系列をアプリアリに導出すること」(SW308)であるが、そうした力動的段階系列は、根源的三元性という自然の根本的構造、すなわち無限性および有限性、拡張および制限、能動性および阻害、産出性および産物という構造が自己展開並びに反復して一層複雑な非有機的な諸形式、諸過程、諸体系になり、次いで有機的なそれらになる系列として展開され、個々の事物は、既にみたように作用比としての質と捉えられ、全体が力動的原子論と名づけられるのである。ともかく個別的事物において有限性と無限性がどのように規定され関連づけられるかということの解明は『第一草案』においてはなされていない。

事態は「ブルーノ」(Bruno oder über das göttliche und natürlich Princip der Dinge, 1802)においても変わらない。そこでシェリングは「有限なものは何によって無限なものと同じに結ぶことができるか」と思われるのか」(SW4124)という問を提出しているが、それに対する答えは、次のようにおよそ論証とは言えないものである。「我々が直観作用と思考作用との統一態と呼ぶものの中には、有限なものと同無限なものとの統一態も含まれている」(SW4242)。たしかにシェリングは、無限なものも有限なものも、各々がそれであるものとなるのは、それ自体としてではなく、各々に対立しているものによることを認め、有限なものそのものは常に別の有限なものによって規定され、こうした規定の仕方によって有限なもの無限系列が生ずることを認めるが(vgl. SW4247)、最終的には次のように断定されるだけである。「だがこの無限に有限であるものは、イデアの中ではそれ自体そのもの無限なもの das an und für sich selbst Unendliche と一つのものとして置かれており、それと直接に結びついている」(SW4144)。このような結論は、「直観作用と思考作用との統一態」とされる知的直視の立場から規定されるにせよ、設問に対する回答としては何も語っていないと言わざるをえない。

ところで以上にみたシェリングの無限なものとの関係把握は、少なくとも四つの点で問題を持つ。まず第一の問題は、無限なもの「無制約なもの」として前提され、その阻止点として有限なものが捉えられるかぎり、有限なものの中に無限なもの呈示を見ることが可能であるにせよ、有限なもの否定的運動の中で無限なものが現れ出るのでないことによって、有限なものにとって無限なものは外的にとどまることである。たしかにシェリングはヘーゲルの「悪無限なもの」のモデルと見なさうかのような「経験的に無限なもの」

を指摘しているが、これ自身「絶対的無限性」の外的直観とされ、両者の同一性が知的直観によって保証される構図になっているかぎり、「絶対的無限性はヘーゲルが言う意味での「制限されたものを超えての逃亡」(GW11.88)であり、知的直観はヘーゲルが言う意味で「未完成の反省」(ebd.)である。

シェリングにおける第二の問題は、無限なものとは有限なものが対置されることによって、ヘーゲルが言うように、無限なもの自身「有限な無限なもの」(GW11.80)になってしまうことである。シェリングは「絶対的能動性は、有限な産物によってでなく、無限な産物によってのみ描写されうる」(SW3.14)として、この無限な産物を「根源的に無限な系列」(SW3.15)と言い換え、それ自身合算によってではなく「進展 Evolution」、すなわち出発点にある唯一の無限な量の進展」(ebd.)と捉えるにせよ、それが有限なものに対置されているかぎり、この量は、ヘーゲルが言う意味での悪無限的なものでしかない。

シェリングの第三の問題は、彼の初発の意図にもかわらず、彼の問題設定が無限なものからどのようにして有限なものを導くかという形になっていることである。シェリングは『独断主義と批判主義に関する哲学的書簡』(Philosophische Briefe über Dogmatismus und Kriticismus, 1775)において、フィヒテ的な自我と非我、あるいは一般的な主観と客観という対立を超えた、無制約者を両者の根源的同一性として主張し、それを知の対象としてではなく、行為の対象として定立しようとする試みを提示し、その試みの正当性の論拠をスピノザに求めて次のように言う。「彼〔スピノザ〕は、無限なものから有限なものへのいかなる移行をも、いつさいの推移的原因 (Causa transitoria) をも斥け、世界の流出的原理のかわりに内在的原理を、すなわち内在的で自己の内で永遠に普遍な原因を定立した」(SW1.313)⁹⁹。このようにシェリングは無限なものないしは絶対的なものから有限なるものへの移行はない、と主張するにせよ、『第一草案』においてみたように、無制約なものの存在が前提され、自然哲学の根本課題が自然における力動的段階系列を導出すること、およびその系列を成すものが「自然モナド」と規定されるかぎり、シェリングは無限なものから有限なものへの移行という枠組で無限なものとは有限なものとの関係を問題にしていると言うことができる。そのかぎりシェリングの問題設定はヘーゲルが言う「どのようにして無限なものか自己から出て有限性にいたるか」(GW11.83)という問いに還元され、「そのような〔分離された〕有限なものも、そのような無限なものもともに真理性をもつていなく」(GW11.84)と断定されるべきでないのである。

第四の問題は、知的直観を方法とすることは、哲学的問題の内在的解決には到らないことである。『ブルーノ』が典型的に示しているように、知的直観は一切の哲学的問題を解決する万能の方法として考案されたにせよ、それ自身シェリング自身いみじくも書いているとおり「最高の幸福への秘儀」(SW4.307)でしかない。それによってはヘーゲルが『精神現象学』(Phänomenologie des Geistes, 1807)で言うように「すべての牛が黒くなる暗夜」(GW9.17)が出現するだけである。

ともかく無限性の扱いをみても、シェリングが言うようにシェリング哲学の内容の論理化としてヘーゲルの『論理の学』が成立した、とは確証されないのである。

三 「空間と時間」把握の位相

ヘーゲルは『論理の学』において無限性のカテゴリーを前提に、第三章「向自存在」の内容を「向自存在するものあるいは一」、反撥による「一の数多性への移行」、「牽引」による一の他在の揚棄、質の量への移行として展開し、その過程でカントによる牽引力と反撥力からの物質の構成について論及している。このことから明らかなのは、向自存在の章は物質の構成の論理的展開であるということである。だがヘーゲルは、ニュルンベルク時代の自然の学および「エンツュクロペディー」初版の自然哲学いずれにおいても、物質に先立って空間と時間を取扱っている (vgl. TW4.34ff, GW13.116ff)。『論理の学』で空間と時間が論及されるのは主として「第二編 大きさ(量)」においてであるが、ここでは、物質の構成の前提という意味でヘーゲルおよびシェリングの空間―時間の把握の要点を確認しておくことにしたい。だが、両者の議論を検討するに先立って、カントの空間・時間把握について概観することから始める。

(一) カントにおける空間と時間の位置

カントは周知のように『純粹理性批判』の先験的感性論 (transzendente Ästhetik) において、純粹直観あるいは先天的な直観形式として空間と時間を挙げている。その理由は、我々が外感によって対象を我々の外、すなわち空間においてあるものとして表象し、また内感によって心的状態をすべて時間のうちにあるものとして表象するからである。カントは空間と時間を人間の主観の感性の形式とすること

によって直観に与えられる対象が主観的なもの、すなわち物自体ではなく現象であることを論証しようとした。

カントはまず空間が先天的直観であることの論証を次の四つの「形而上学的究明」(ある概念(この場合は空間)を分析してそれぞれ先天的であるゆえを証明しようとするもの)によって行おうとする。(1)空間は外的経験から抽象された経験的概念ではない。なぜなら外的経験は、既に予め空間の表象によつてのみ可能だからである。(2)空間はあらゆる外的直観の根底に存する必然的な先天的表象である。つまり空間の中に全然対象が存在しないことを考えることはできるが、空間そのものが存在しないということは表象できないからである。したがって空間は現象が可能となる条件である。(3)空間は一般的な概念ではなくて純粹直観である。なぜなら我々はただ一つの空間を表象できるだけで、多くの空間について語る場合も、唯一の空間のうちのみ考えられる。だから先天的な直観が空間概念の根底に存している、と言える。(4)概念は無限に多くの表象を自分のうちに包括することはできないが、空間は無限量として表象されるので、空間という根源的表象は先天的直観であつて概念ではない。以上カントは(1)と(2)によつて空間の先天性を、(3)と(4)によつて空間が直観性であることを論証したとする。

カントは更に続いて空間の「先験的究明」を行っている。先験的究明とは「ある概念をそれに基づいて他の先天的総合的認識の可能性が理解される原理として説明すること」であり、カントによれば空間が先天的直観であることによつてのみ幾何学的認識が先天的総合的認識であることが理解される。つまり、カントによれば幾何学は空間の性質を総合的に規定する学問であるが、こういう認識が成り立つためには空間は、まず分析判断のみで作られる概念ではなく、総合判断が可能である直観でなければならぬ。また空間は、単に直観であるだけでなく先天的直観でもなければならぬ。なぜなら空間が経験的直観であれば、空間についての認識である幾何学は経験的認識であつて必然性を持ちえないが、幾何学的認識は必然性を持つているからである。カントはこうして空間を先天的直観として我々の心性のうち具わっている直観の形式とする。

時間についてもカントは同様の論証を行なっている。形而上学的究明は次のようになる。(1)時間は経験から抽象された経験的概念ではない。なぜなら時間表象が先天的に根底に存しないなら、知覚における一切の時間限定(あるものとの同時存在あるいは継起など)は不可能だからである。(2)我々は時間から現象を取り去ることはできるが、現象から時間は除去できない。従つて時間は一切の直観の根底

に存する先天的必然的表象である。(3)時間は概念ではなく、感性的直観の純粹形式である。何故なら様々の異なった時間は同一の時間の部分にすぎないからである。(4)時間表象は無限なものとして与えられ、一定の長さの時間は、唯一の時間の制限として考えられる。したがって時間は概念ではなくて直観である。²⁰⁾

時間についての「先験的究明」として、カントは、時間については必然的原則ないし公理(例えば、時間は一方位のみ有する、異なる時間は同時的でなく連続的である、(など)があると考えられることをもって、時間が先天的直観であると論証している。²¹⁾

かくしてカントは空間を「外部感官のもつあらゆる現象の単なる形式」、時間を「内部感官の形式」と規定し、これら両者を「すべての現象の形式」であるとともに「我々の直観の形式」と二重的に捉え、これら二重性を「空間および時間は、両者相合して、すべての感性的直観の純粹形式であり、そのことによって先天的総合命題を可能ならしめるのである」と言うように、同一的なものと捉えるのである。同時にカントが空間よりも時間を一層主観的なものまた基底的なものとして捉えたことは次の引用から明らかである。「いっさいの外的直観の純粹形式としての空間は、先天的な条件として、外的現象にのみ限定される。これに反していっさいの表象は——外的な物を対象とするにせよまたそうでないにせよ、それ自体、心性の規定として内的状態に属し、この内的状態は、内的直観の形式的条件のもとに、それゆえにまた時間のもとに属するがゆえに、時間はいっさいの現象の先天的な条件である。しかも内的(我々の心の)現象の直接の条件であり、またまさにこのことによって間接的に外的現象の条件でもある」²²⁾。このようにカントにおいて時間はいっさいの現象の先天的な条件なのである。

ともかくカントはニュートンの、相対的空間、相対的時間に對置される、絶対空間、絶対時間という把握、またライプニッツの空間を「共存の序列」、時間を「継起の序列」と規定する空間・時間把握に対する批判として自らの空間・時間概念を定立したのであり、同時にそこには認識可能領域に現象を組込みながら、そこから物自体を排除するという意図が働いていることは明らかである。

(二) ヘーゲルにおける空間と時間の規定

ヘーゲルはニュルンベルク時代の「エンツュクロペディー」(一八〇八年)において「純粹直観がその直接性〔単なる純粹直観〕から即且向自存在〔客観的存在〕に移行したもの、言いかえると充実された空間と時間が物質である」(TW4.36)と述べている。また彼は『エンツュクロペディー』初版(一八一七年)においては、「空間の時間への、また時間の空間への移行と再生産が運動である」(GW13.122f.)と述べている。これらの記述を手がかりにヘーゲルの空間―時間把握を検討してみよう。

①空間と時間の共通性

『論理の学』第一書第二編「大きさ(量)」の第一章「量」の注解において、ヘーゲルは純粋量の実例として空間・時間を挙げてそれらに次のような規定を与えている。「空間、時間等々は、自己の外に出る運動、流れる運動であるところの拡がり、数多的なものである。だがこの運動は、対立したもの、すなわち質または一へと移行するのではなく、自己の外に出る運動として、反復して行なわれる自己産出活動である」(GW11.113)。ここでヘーゲルは空間と時間の共通性として拡がり、数多的なものを反復的に自己産出する活動を指摘している。このように空間と時間を量的連続性から捉える視角は、より具体的には、「ニュルンベルク・エンツュクロペディー」の次の規定を背後に持っている。「時間と空間は定在という形をとった抽象 *die daseienden Abstraktionen* であり、言いかえると自然の純粹形式、自然の純粹直観である」(TW4.34)。「定在という形をとった抽象」とは空間と時間が質を捨象した量として現実性を有することを表現する規定であり、その特性は連続性という面から「無限界 *Genozios*」(edd.)と捉えられる。このことはさておき、ここに挙げられた空間と時間の一般的規定が、カントと共通性を持つことは「純粹形式」「純粹直観」という用語から知られる。このように空間および時間を感性の形式と捉える立場をヘーゲルが一貫して堅持していることは、『エンツュクロペディー』初版で空間と時間が「感性あるいは直観の純粹形式」(GW13.119)と規定されていることから明らかである。

それではヘーゲルの空間および時間把握はカントのそれと同じかといえば、直ちにちがいが明白になる。カントは先に見たように、空間と時間が純粹直観であることの一つの論拠を概念ではないことに求めたが、ヘーゲルは空間と時間を概念と捉える。「理念である点では、時間と空間は、概念の諸契機で概念を叙述する諸規定、すなわち次元をそれ自身の中に持っている」(TW4.34)。ヘーゲルが空間および時間

を概念と捉えることの意味は、彼の空間と時間に関する固有の見解を検討して初めて明らかとなる。それゆえ空間および時間に関するヘーゲルの見解を個別的に検討することによろう。

②空間の論理的規定とその固有性

『論理の学』において、空間と時間の共通規定に続けてヘーゲルは自己の空間把握を次のように展開している。「空間は絶対的な自己外存在 *Außersein* であり、それは同様にまた端的に中断されない存在であり、自己自身と同一である、他在であり再他在である」(GW11.113)。空間が絶対的な自己外存在であるということは、区別可能な点の抽象的な数多性として空間を捉えることを意味する。つまり空間はそのうちにある区別可能な諸々の点によって区別されながら、空間自身では区別を持たないことが自己外存在の内容である。このような空間の存在様態は、「ニュルンベルク・エンツユクロペディー」では、「空間は一般的な無関心な差異性一般が定在の形をとった思想である」(TW434)と定式化されている。この定式化は、空間の基本的様態を、他のものと同じである多くの可能的点、相互に区別されながらもただ並んでゐる外的並列態として捉えていると見ることが出来る。

だが空間はそうした可能的点の外的並列態に留まるのではない。ヘーゲルは空間を他在となり、更に再他在となりながら自己と同一のものと規定している。この規定でヘーゲルが暗示しているのは「空間の次元」(ed.)にはかならない。それはイェナ期の自然哲学に遡れば、空間一般の否定者としての点を第一次元とし、第二次元として線、そして第三次元として面が挙げられている(vgl. GW8.74)。これらはそれぞれ他の否定でありながら、空間としての性質的な統一のため次元は、はつきり対立しないとされる(vgl. TW434)。そしてこのような空間把握のうちに、真なる無限性の基本構造が透視されていることも確認される。

しかし、ヘーゲルの固有性は、空間と時間をカントのように別のものとして扱わないことである。すなわち、ヘーゲルは空間の差異性を現実化して諸次元を現出させる働きを「否定」と規定し、そのような否定の働きそのものを時間とする。「時間はそれ〔空間〕の成果、または〔それの〕真理である」(GW8.14)。この規定の意味するところは、空間の現実化を抽象的空間を否定する運動として定立した場合、その運動は時間の継起する運動でもあるということである。この規定をより具体的に解明するためには、ヘーゲルの時間規定そのものが検討されなければならない。

③時間の論理的規定とその含意

i ヘーゲルの時間把握

ではヘーゲルの時間把握そのものはどのようなものか。時間に関してヘーゲルは『論理の学』においては次のように規定している。「時間は絶対的な自己の外に出る運動、無に帰する運動 *Zurückwerden* であり、それはこの消滅をたえず再び無に帰する運動である。その結果、非存在のこの自己産出活動は、同様にまた自己との単一な相等性および同一性である」(GW11.113)。

ヘーゲルは時間を空間との差異という観点からは「ニュルンベルク・エンツュクロペディー」では「時間は否定的統一または純粹生成が定在の形をとった思想である」(TW4.34)と定式化している。『論理の学』における「消滅を無に帰する運動」とは、ここでいう「否定的統一または純粹生成」を指す。そしてこの純粹生成は時間の次元と関わりを持つ。言うまでもなく時間の次元は次のように三つの次元に分たれる。「時間の三つの次元は、a 過去 *Vergangenheit*——止揚されたもの、定在しないもの、としての定在、b 未来 *Zukunft*——「いまは」非定在であるが、定在することになっていゝるもの、c 現在 *Gegenwart*——直接的な生成であつて、両者の統一であるもの、である」(TW4.34f)。このような時間の様態を三つの次元に分けることは静止的な印象を与えるが、それぞれの次元の規定に踏み入るなら、ヘーゲルの時間把握が動的であることが判明する。すなわちヘーゲルはイエナ期の自然哲学講義においては、時間の第一次元を直接な「*Ein*」[「今 Jetzt」] 現在」(GW8.11)とし、その特性を「しかし、この「今」の」単純さとその存在とは同様にその直接性を直接に否定するものであり、そのそれ自らの止揚である」(GW8.12)と規定している。ここで言われていることは、特定の「この今」は直ちに「別の今」にとつて代わられるという事態である。そしてヘーゲルは、「この今」としての時間の存在を否定する非存在を「未来」(*and*)とし、これを時間の第二次元とする。更にヘーゲルは、直接的な今の非存在のもう一つの形態を「直接的なもの否定する『今』を止揚した『今』」(*abd.*)、すなわち「過去」とし、これを時間の第三次元としている。このように、ヘーゲルは、時間を最初は空間同様、いかなる区別に関しても無関心的であり、自己自身のうちに区別を持たない連続体と規定しながら、実際には静止した並存態として捉えるのではなく、不断に存在から非存在へ、また非存在から存在へと移行行く生成・消滅の運動と捉えている。このように時間が存在から非存在への、またその逆の移行と捉えられることによって、「否定的統一または純粹生成が定在の形をとった思想」と言われるのである。そして、空間同様時間そ

のものも真なる無限性の規定を内具したものと捉えられていることは明かである。

ii アリストテレスの時間把握

ところで以上に見たヘーゲルの時間了解はどのような評価が与えられるであろうか。よく知られている評価としてはハイデガーのものがあつた。ハイデガーはヘーゲルの時間概念をアリストテレスの『自然学』における通俗的時間了解の忠実な再現と捉え、その根拠を次のように示している。

「アリストテレスは時間の本質を今 (*vov*) のうちに見、ヘーゲルも今 (*Jetzt*) のうちに見る。アリストテレスは今を限界 (*oikos*) と解し、ヘーゲルも今を『限界 (*Grenze*)』と解する。アリストテレスは今を点 (*ortun*) と了解し、ヘーゲルも今を点 (*Punkt*) と解釈している。アリストテレスは今をこのあるもの (*to eon*) と特色づけ、ヘーゲルも今を『絶対的なこのもの (*das absolute Dies*)』と名づける。アリストテレスは伝統に従って時間 (*chronos*) を円 (*skhiza*) と関連させ、ヘーゲルも時間の『循環 (*Kreislauf*)』を強調する」²⁶。

ハイデガーの指摘は、これまでのヘーゲルの議論を踏まえ、この引用箇所を見るかぎり、至当と見える。だがアリストテレスの時間把握そのものに遡行した場合、ハイデガーの立論には疑義が呈されることになる。アリストテレスの時間論は主として『自然学』第四卷の中で展開されていて、その骨子は次の4点にまとめられる。

(1) アリストテレスによれば、時間はその総体からみて過去と未来とから合成されるが、過去は「もはやあらぬ」というあり方をし、未来は「いまだあらぬ」というあり方をしている。言いかえると時間は過去および未来という部分に分割されるものであるが、これらの部分はいずれも「あらぬ」ものであり、実在性を持ちえない。要するに今の存在が時間の存在なのである。²⁷

(2) アリストテレスが時間の問題として中心的に問うのは「今」のあり方である。アリストテレスは「今」を既に過ぎ去つたもの (過去) とまさに来ようとしているもの (未来) とを区切る「限界」とするが、その論証は、「今」が常に他であるとしても、常に同一であるとしても不合理であることを内容とする。すなわち、「今」が常に他あるいは異であれば、今は分割可能となるが、今は諸々の今から合成されるのではない。それは線が点から合成されえないのと同じである。したがって今は分割不可能なものとして量をもたない。また今は常に今として同一のままに留まることはできない。もし今が継続する今であつて他の今に移らなければ、時間はないことになるからである。かく

して今は点として限界であることになる。言いかえれば「今」において時間は連続的となるとともに分割されるのである。²⁷⁾

(3) アリストテレスは時間の経過を前の「今」と後の「今」との異なりの知覚と関連づけ、そこから時間は運動ではないにせよ運動なしに存在しないことを強調し、前後の知覚から時間の存在を結論づける。「というのは、時間とはまさにこれ、すなわち、前と後に關しての運動の数であるから」²⁸⁾。更にアリストテレスは、運動の数を数えることができるものは靈魂あるいは理性のみとし、靈魂が存在しないかぎり、時間の存在は不可能とする。ここには計測主体の存在を前提し、時間を客観的に測定可能なものとするとともに、時間を運動する事物がそのうちにある容器のようなものとする立場が確認される。²⁹⁾ 更にはカントが時間を現象の先天的条件および先験的形式とした淵源も認められる。

(4) 前項で見たように、アリストテレスが時間を「前と後に關しての運動の数」と把握したことは、彼が時間を運動によって数量的に捉えただけでなく、時間と空間とを別個のものとし、時間および空間を並列的に扱いうるものと捉えたことを意味する。実際彼は、空間と時間を別個に考察するだけで両者の關係をそのものとして問うことはしていない。³⁰⁾

iii アリストテレスとヘーゲルとの差異

ここでアリストテレスの時間把握とヘーゲルのそれとを対比してみよう。

(1) アリストテレスが実在性を認めるのは今としての現在だけであるが、ヘーゲルは現在だけでなく、未来および過去を実在するとする。すなわちヘーゲルは未来を「今」の非存在としながら次のように言う。「それ〔今〕の非存在」は、空間の限界としての面そのものが空間的であるように「今」そのものである。だから未来は直接に現在の中に在る」(GW8.12)。同様にヘーゲルは過去を今とすることによってその実在性を主張する。「過去そのものは次元にすぎず、直接にそれにおいて止揚された否定作用にすぎない。あるいはそれは今である」(GW8.13)。このようにヘーゲルにおいて今としての現在は、未来と過去を同時に包括するものである。それゆえ「ニユルンベルク・エンツクロペディー」において現在は過去と未来との統一とされたのである (vgl. TW4.34f.)。

(2) アリストテレスは時間を「今」の継起すなわち非連続的連続性として捉えた。ハイデガーは、時間が今の連続とされるなら「本来的な時間性に属している瞬間の脱自的現象」³¹⁾が解明されないとして、アリストテレスおよびヘーゲルを批判した。たしかにアリストテレスにお

いて時間が今の継起とされるかぎり、時間の脱自的性格は隠蔽され、時間は水平化される。だがヘーゲルの場合、時間を今のうちに見たとしても、時間が運動と捉えられることによってその脱自性が視野に収められたことは、時間が既に確認したように、「絶対的な自己の外に出る運動、無に帰する運動」(GW1113)と規定されていることおよび次の引用から確認される。「空間、時間、物質等々は、それらが自己自身からの反撥であり、流動的な自己」を脱出する運動である」(GW1122)。ここでは時間だけが問題にされているわけではないが、時間の在り方が自己超脱的脱自的運動として捉えられていることは疑いえない。

(3) アリストテレスは、時間を運動する事物がそのうちにあるもの、と言わば空間的に捉えたが、彼は空間を場所と同一視する形で場所を容器と捉えている³⁵。カントが空間と時間を先験的形式としたことも同じ発想に基づく。これに対してヘーゲルは、空間および時間そのものに運動を認めることによって、単なる容器とする空間—時間把握を斥けている。こうした立場は「エンツュクロペディー」初版で次のような具体化されている。

「通常時間の中で全てのものが発生し、消滅すると言われる。時間はまさに発生と消滅そのものの抽象だからである。全てのもの、すなわち時間の充実、同様に空間の充実が捨象されれば、空虚な時間と空虚な空間が残る。——すなわちこの場合外面性のこうした抽象が定立されている。だが時間そのものがこの生成であり、この存在する抽象作用であり、すべてのものを生みながら自らの産んだ子を破壊するクロスである。——実在的なものは時間とは違っていると同時に同一なのである」(GW13:119)

ここでヘーゲルは、時間および空間を容器と捉えるアリストテレス的立場を斥け、実在的なものと時間との同一性を主張している。ここに語られていることは、物が時間の中にあるから消失するのではなく物の生起・消滅の過程と時間は同一であるということである。言い換えれば物そのものが時間的であり、時間的であることが物の客観的規定であり、現実的な物の過程そのものが時間を構成するということである。こうしてヘーゲルは、アリストテレスともカントとも異なる時間把握を定立したものである。

(4) ヘーゲルは空間と時間を別個のものとするのではない。ヘーゲルはイェナ期の自然哲学講義において、点が空間において「ここ」、時間において「今」と言うことができることによって次のように空間と時間との同一性を場所と規定することを試みている。

「接続するものの直接性において次元はまずはじめに空間の形式を持つ。しかし点はまさしくそのために全空間として、諸次元の総体とし

て存在する。(略)それはいまでは全空間であり、言いかえれば一つの「ここ」である。(略)「ここ」はとてどまったく同様時間に存在する。(略)「ここ」は同時に「今」であると言える。なぜなら「ここ」は持続の点だからである。この「ここ」と「今」の統一が場所 (der Ort) である」(GW8,15)。

場所は空間と時間との指定された同一性として、この場所でありながら、また空間的な今として時間としてもある。時間としての今に着目するならばそれは、永続する自己止揚であることによって静止することなく、そのことは場所という観点からは、今である場所、以後に占めるべき場所、置き去られた場所の常なる推移となり、運動となる (vgl. GW8,17)。「ここからヘーゲルは運動について「運動の本質は、時間と空間との直接的な統一であることに存する」(GW8,18)と定式化している。またそこにおける時間と空間との関係は、「それ〔時間と空間との直接的統一〕は、空間を通じた実在的な、存立する時間であり、あるいは時間を通じてはじめて真に区別される空間である」(ibid.)と説明される。つまり運動は空間が時間へ、時間が空間へ消滅したり再生したりすること、すなわち時間が空間的に場所として定立され、しかもこの空間性がまた直接に時間的に定立されるということである。このような意味においてヘーゲルは時間と空間との同一性を諦視したと言えるのである。

以上を要約すれば、ヘーゲルの時間把握は、(1)時間の三次元は全て実在すると捉える、(2)時間をただ「今」の流れと見るのではなく、脱自的運動と捉える、(3)時間は主観によって定立される容器あるいは形式であるだけでなく、事物そのもの実在形態でもあると捉える、(4)時間と空間は別個のものとして切り離されるのではなく、物質の運動として現実的統一を保持していると捉える、という点において、アリストテレスおよびカントの時間把握とは異なり、ハイデガーのヘーゲル理解は全面的に支持されるものではない、ということである。次にシェリングの空間—時間把握を検討しよう。

(三) シェリングにおける空間と時間

シェリングにおける空間と時間の扱いを見た場合、初期の自然哲学においては、空間および時間は消極的位置しか与えられず、同時にまたそれ自身としての検討はなされていないと言っても過言ではない。例えば『世界靈魂について』においては、空間および時間はともに「有

限性の形式」(SW1.364)と位置付けられ、両者の関係については次のように語られる。「空間と時間は二つの相互に相対的な否定である。したがって両者のいずれのうちにも絶対的に真なるものがあるのではなく、各々において、それが他を否定するところのものがまさしく真である。空間はそれ自身で同時性 *die Simultanität* であり、それが時間の反対であるかぎり、空間のうちには真理の仮象がある。反対に時間 *das Auseinander* を揚棄し、事物の内的同一性を定立する。それに対して時間は、空間の否定的なものを否定しながら、それ自身否定的なもの、すなわち事物における相互前後 *das Nacheinander* を伴う」(SW2.368)。ここでシェリングが言っていることは、空間・時間いづれの非本質性も他において否定されるので、相互による他の否定によってのみ真なるものが定立されるということである。

だが思想の進展とともに、空間と時間の規定は変えられる。「第一草案」では空間は、物質の規定が「空間充実 *Raumerfüllung*」(SW3.264)と捉えられるように、物質把握の中心に据えられ、「自然哲学体系草案序論」(*Einführung zu den Entwurf eines Systems der Naturphilosophie oder über den Begriff der spekulativen Physik und die innere Organisation eines Systems dieser Wissenschaft*, 1799) では、時間は、「根源的無限系列 (あらゆる無限系列の理想) は、(略) 時間である」(SW3.285)と言われるように、重要な位置を与えられ、「先験的観念論の体系」においては両者の本来の導出が行なわれる。これについてみよう。

『先験的観念論の体系』は、「自我は自我である」を唯一確実な命題として持つ自我 (vgl. SW3.372) が、自ら設定した限界において自己自身を直観することによって自己自身を客観化し、この命題を主観としての自我と客観としての自我の同一性を示す総合判断に至るまで自己を規定してゆく過程を叙述する「自己意識の歴史」(SW3.399)である。さてシェリングによれば、無制約的な自我は、「自己自身を産出あるいは客観化する活動と自己自身を直観する活動との二重性を有するが、自我の自己直観活動の中で直観する自我は、直観される自我すなわち表現された自我において限界、自分の対立物を見出す (vgl. SW3.380)」。この直観活動と直観されたものとの関係によって自我と世界との関係が導出される。まず自我は自己自身の側に受動性である感覚を、世界の側に感覚を触発するものを見出し (vgl. SW3.411ff.)、次に「自我が自らを「限界づけられたもの」として直観することによって、自然の側に物自体が、自我自身の側に直観が見出される (vgl. SW3.427ff.)。更に自我が自らを「直観するもの」として直観することによって、直観作用に対する直観は作用の持続としての時間を見出し、直観の対象に対する直観は対象の場として空間を見出す。その際、シェリングの空間—時間把握は次のような四つの特徴を有する。

(1) シェリングは時間を内的感覚と結合する。すなわち彼は「自我はどのようにして内的感覚としての自己にとつて客体となるのか」という問に対して、「自我に時間（略）単なる点、単なる限界として直観されるかぎりでの時間」が発生することによつて」（SW3.466）と答えている。このように、時間は点であることによつて、「純粹な集中 *reine Intensität*」（*ebd.*）および「二次元に延長した活動」（*ebd.*）であり、それと自我との関係は次のようにまとめられている。「時間は自我から独立して流れるものでなく、活動性において考えられた自我そのものが時間である」（*ebd.*）。ここにはカントが内的感覚を外的感覚の前提としたのと同じ発想が認められる。これに対して客体が同時にあらゆる集中の否定すなわち「純粹延長 *reine Extensität*」（*ebd.*）として現出しなければならないとして、シェリングは空間を導出する。すなわち「それによつて外的感覚が客体となる直観が空間である」（*ebd.*）。空間は絶対的外延として点の対立物である、「解体した自我」（SW3.467）と捉えられる。シェリングは空間から分離された時間を「純粹時間」（SW3.466）と規定し、独立的に捉えられ空間を「純粹空間」（*ebd.*）と名づける。

(2) ところでシェリングは時間および空間を相互に分離したものと捉えるのではない。何故なら、時間、空間は同一客体の直観の過程で生じたものだからである。ここから空間と時間の関係が次のように捉えられる。「したがつて客体そのもの、すなわち産出作用のうちでは空間と時間とは同時に、また相互に切り離されずに発生する」（SW3.468）。このような空間と時間の総合の表現が「線」「拡張された点」（SW3.467）とされる。

だが、空間と時間の関係は、単純な総合ではない。シェリングによれば「両者は相互に制限し合っているので相互に対立しあっている」（SW3.468）。この叙述の意味は、空間と時間はそれぞれ独立している場合には無限であるが、両者が関係づけられた場合、両者とも他方によつて有限となり、他によつて規定され測定されるということである。その場合両者の関係は次のように規定される。「したがつて、時間の根源的尺度は、時間の中で一様に動かされた物体が通過する空間であり、空間の根源的尺度は、一様に動かされる物体が、空間を通過するのに要する時間である」（*ebd.*）。ここにはアリストテレスが時間を数で規定できるとした立場がそのまま維持されているとみることができらる。

(3) しかし、シェリングは空間と時間の関係をもう一つ別の視角から問題にしている。すなわちシェリングによれば客体は、延長と集中

であると同様に、実体 Substanz と偶有性 Accidens でもあり、両者は分離されえない。そして両者の関係は次のように規定される。「客体において実体であるものは、空間においてただ一つの量を持ち、偶有性であるものは、時間の中でただ一つの量を持つ。充実された空間によって時間は固定され、時間の中の量によって空間は特定の仕方であ実される」(SW3.469)。このような空間と時間の関係と実体と偶有性の関係の対応は、実体が空間のうちに存在を有することによって、時間から完全に独立した存在を有するという論拠から、空間と実体、時間と偶有性がそれぞれ対応づけられる。実体と偶有性の関係は、通例、原因と結果との関係に置き換えられることによって、シェリングも空間を原因、時間を結果としても規定する (vgl. SW3.473)。こうした関係において知性は諸表象の継起 (Succession) と捉えられ、その方向が「一次元」を有する時間とされる (vgl. SW3.474)。

だが、シェリングは実体―属性関係に根拠という概念を持ち込み継起の固定化を試みる。すなわち実体は実体であることの根拠は偶有性の存在であり、偶有性が偶有性であることの根拠は実体の存在である。つまり、実体と偶有性のいずれもが他方の根拠であり、こうした事態をシェリングは「交互作用 Wechselwirkung」(SW3.475) と名づける。そしてこのように交互作用によって継起が固定化された状態が「現在 Gegenwart」(ebd.) とされる。ともかく、シェリングは、自我の活動を基底に据えた空間と時間の関係から関係のカテゴリーの導出を図っているのであり、それはカントのカテゴリー表の力動的導出と意味づけられているのである (vgl. SW3.477)。

(4) シェリングにおいて空間および時間は、形式として捉えられている。シェリングは相互作用によって「共存性 Koexistenz の概念」が導出されたとして、それを実体同士に適用される概念とし、そのような観点から捉えられる空間を「単なる共存性あるいは同時存在 Zugleichsein の形式」(SW3.476) と規定している。この文脈において空間は「停止した時間」(ebd.)、時間は「流れる空間」(ebd.) と捉えられることによって、時間もまた形式と規定されることになる。実際シェリングは、カント同様に「空間は概念をもたない直観作用である」(SW3.513) と言いつつ、空間を「無限なものへの直観作用」(ebd.) と規定している。時間についてもシェリングは概念でないことを、多くの時間があるように見えても時間は唯一の時間であるとして次のように言う。「様々な異なった諸時間と名づけられるものは、絶対的時間の様々な制限にすぎない」(SW3.519)。だがこの形式の存在性格は「先験的観念論の体系」においては不明確であり、この点について明確に述べているのは、『學問論』(Vorlesungen über die Methode des akademischen Studiums, 1803) である。すなわちシェリングはそこで改めて

空間および時間について論じている。

シェリングは、存在と活動を対立するものと捉え、空間を「一切の活動を否定する純粹存在」(SW5:251)と規定し、その存立様態について、次のように述べている。

「しかしこのもの〔空間〕は抽象物ではない。なぜなら、もし抽象的だとすれば、実際には空間は一切の空間においてただ一つしかないのに、数多の空間がなくてはならないことになるのだから。またそれ〔空間〕は具象物でもない。なぜなら具象物だとすれば、空間の抽象概念があるべきであり、これに対して空間は特殊としては完全には相当しないことになるから。しかし空間は全然あるがままのものであって、空間において存在は余すところなく概念を汲み尽くしている。そしてまさに空間は絶対的に実在的であるがゆえに、またそれゆえにのみ、絶対的に観念的でもある」(ibid.)。

ここでシェリングが言おうとしていることは、空間は抽象物でないという意味において実在的であり、具象物でないという意味において、観念的であるということである。最終的にシェリングがこのような空間把握で含意しているのは、アリストテレスが言う「容器」としての空間である。同様にシェリングは時間についても「一切の存在の否定を伴う純粹活動」(ibid.)と捉え、その存立様式を次のように捉えている。

「いかなる存在も存在としては時間のうちにはなく、活動の表出として、また存在の否定として現象する存在の変化のみが時間のうちにあるのである。経験的時間のうちでは、可能性は原因として現実性に先行し、純粹時間のうちでは可能性はまた現実性でもある。普遍的なものの特種的なものとの同一性として、時間は抽象的概念でもなく、具象的事物でもなく」(SW5:251f.)。

この時間の存立様式の規定は、時間をいわば、流れを物を載せて下る船と捉え、しかも載せられた物を決して実体としての物そのものではなく、偶有性としての物としか捉えないという前提を設定している。このことは続けて「前者〔空間〕も後者〔時間〕も自体にあるもの規定ではなく」(SW5:252)と言われていることから明白である。

このような空間および時間の把握が、空間および時間を形式でありながら事物そのものの実在形態とするヘーゲルのそれとは決定的に異なるものであることは、繰り返し確認されなければならない。

ところでヴェルナー・ゲントは、シェリングが『全哲学の体系』(System der gesamten Philosophie und der Naturphilosophie insbesondere, 1804)において空間―時間の別様の導出を行なっていること³³に高い評価を与えているが、結論的に言って『全哲学の体系』における空間―時間把握が空間―時間を「有限性の形式」とする従前の基本的枠組を出るものでないことは、空間については、「空間は、事物が絶対的同一性、すなわち無限の定立 Position から切り離されているかぎりでの、事物の空無性の単なる形式 die bloße Form der Nichtigkeit der Dinge」である」(SW6.221)と言われ、時間については、「時間、継続は、絶対なるものに対しては全く適用されえない概念である」(SW6.159)と言われていることから明らかである。

ではシェリングは終生これまで確認してきた空間―時間把握を保持したのかと言えは、そうではない。晩年の『自然過程の叙述』(Darstellung des Naturprozesses, 1843)において、シェリングは、空間は、実存在の内容に関しては無関心でありながら、実存在の形式として実存在成立の根源的な可能条件であり、そういうものとして個体として存在するという。したがって、空間は「空間の中に一切のものに対して必然性もしくは先位性 Priorität」(SW10.327)を持つ。ここには空間を主観的形式ではなく、実存在の形式として実在的であるという主張、すなわち空間の客観性の主張が認められる。時間についても同様の見解が想定される。この講義草稿には時間に関する具体的な叙述は含まれていないが、「唯一のものとしての自己」を揚棄する主体の呼気が空間を定立するように、取り戻しの試みと考えられる牽引が時間を定立し、空間と時間の両者が合して絶えざる運動を構成する」(SW10.328)と言われるように、呼気⇨延長⇨空間と牽引⇨集中⇨時間とによって運動が構成されるかぎり、時間は空間と同じく実在的性格を与えられていると考えられるからである。

とはいえ、この晩年のシェリングの空間―時間把握は、いわゆる消極哲学期の主観的な空間―時間把握を否定した客観的、実在的なものと言えても、やはり一面的と言わざるをえないことは明白である。その意味でシェリングの空間―時間把握は、ヘーゲルの空間―時間把握の一面のみを前期および後期に展開したのであり、この問題領域でも、ヘーゲルの『論理の学』が前期シェリング哲学の内実の論理化にすぎないというシェリングの主張は妥当性を有しないのである。

むすびにかえて

本稿ではヘーゲル『論理の学』の「定在」章における質および無限性、ならびにそれと関連した空間—時間の討究を試みた。本来は「向自存在」章における物質構成の論理的規定をも検討する予定であったが、紙数および時間の都合上このテーマを他日に譲らざるをえなくなったことは遺憾である。しかしながら、不十分とはいえ、討究の枠内でヘーゲル哲学の立脚点がアリストテレスとも、カントともそしてまたシェリングとも異なることの一端は明らかにしたことを確信する。それはまたハイデガーのヘーゲル時間論評価の一面性の開披の確信にもつながる。フッサールのガリレイ評価をもじって言えば、ハイデガーは発見する天才でもあれば、陰蔽する天才でもあるからである。ともあれ、ヘーゲル『論理の学』を字面の解釈から解放する作業は継続されなければならない。

注

引用において、括弧内の略符号はそれぞれ次の使用テキストを表し、後続する数字で巻数および頁数を示す。

GW = Georg Wilhelm Friedrich Hegel *Gesammelte Werke*, in *Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft*, herausgegeben von der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Hamburg 1964ff.

TW = G.W.F. Hegel *Werke in zwanzig Bänden*, Theorie Werkausgabe, herausgegeben von E. Moldenhauer und K.M. Michel, Frankfurt am Main 1970.

SW = *Friedrich Wilhelm Joseph von Schellings Sämtliche Werke*, herausgegeben von K.F.A. Schelling, Band 1-14, Stuttgart 1856-1861.

- (1) Vgl. Nicolai Hartmann, *Die Philosophie des Deutschen Idealismus*, 3. Aufl., Berlin 1974, S.417.
- (2) Vgl. Jan Van Der Meulen, Hegel: Die gebrochene Mitte, Hamburg 1958, S.43.
- (3) Vgl. Othmar Spann *Gesamtausgabe*, Bd. 9: *Kategorienlehre*, herausgegeben von W. Heinrich et al., Graz 1969, S.144f.
- (4) Vgl. Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, herausgegeben von R. Schmidt, Hamburg 1968, [A57, B81].
- (5) Vgl. *ibid.*, [A70, B95]. (6) Vgl. *ibid.*, [A80, B106].
- (7) *Ibid.*, [A143, B182]. (8) *Ibid.*, [A291, B347]. (9) *Ibid.*, [A143, B111].
- (10) *Ibid.*, [A176, B218]. (11) Vgl. *ibid.*, [A292, B348f.].
- (12) G.W.F. Hegel, *Vorlesungen: Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte*, Bd.11, *Vorlesungen über Logik und Metaphysik*: Heidelberg 1817. Mitgeschrieben von F.A. Good, herausgegeben von K. Gloy, Hamburg 1992, S.83.
- (13) Vgl. *ibid.*, S.84.

(14) レーヴはシェリングの質の量的表現の試みを、間接的に元素の周期律の発想の先取りとして評価しているが、質を量で表現することはできても、量ごと
ういう質をもたらずかは、必然的に明らかとは言えない。そのかぎりシェリングの試みは限界を有すると言える。

Vgl. Reinhard Löw, *Qualitätenlehre und Materienkonstruktion. Zur systematischen Aktualität von Schellings Naturphilosophie*, in: Schelling: Seine Bedeutung für
eine Philosophie der Natur und der Geschichte, herausgegeben von I. Hasler, Stuttgart-Bad Cannstatt 1981, S.101.

(15) Cf. Charles Taylor, Hegel, Cambridge 1975, pp.114-115, 240-244.

(16) Cf. Spinoza, *Ethica*, Pars Prima, Propositio XVIII, Spinoza Opera · Werke, Bd. 2, herausgegeben von K. Blumenstock, Darmstadt 1967, S.120.

(17) Vgl. Kant, a.a.O., [A23ff, B38ff.].

(18) *Ibid.*, [B40]. (9) Vgl. *ibid.*, [A25ff, B40ff.].

(20) Vgl. *ibid.*, [A30ff, B46ff.]. (12) Vgl. *ibid.*, [A32, B48ff.].

(22) *Ibid.*, [A39, B56]. (23) *Ibid.*, [A34, B50ff.].

(24) Vgl. *ibid.*, [A39f, B56ff.].

(25) Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 11. Aufl., Tübingen 1967, S.432.

(26) Aristoteles, *Physica*, 218a1-3, 220a1. 『アリストテレス全集』・『自然学』出隆・岩崎允胤訳、一六四―一五頁、一七二頁。

(27) Cf. *ibid.*, 218a9-25. 『自然学』一六五―一六六頁。

(28) Cf. *ibid.*, 220a3. 『自然学』一七二頁。

(29) Cf. *ibid.*, 218b27-219a1. 『自然学』一六六―一六九頁。

(30) *Ibid.*, 219b1. 『自然学』一七〇頁。

(31) Cf. *ibid.*, 223a25. 『自然学』一八六頁。

(32) Cf. *ibid.*, 222b30. 『自然学』一八五頁。

(33) Cf. *ibid.*, 217b29. 『自然学』一六四頁。

(34) Heidegger, a.a.O., S.267.

(35) Cf. Aristoteles, *op.cit.*, 209b29. 『自然学』一三八頁。

(36) Vgl. Werner Gent, *Die Kategorien des Raumes und der Zeit bei F.W. Schelling*, in: *Zeitschrift für Philosophie*, Bd.8, 1954, SS.363-370.

Der Begriff der wahrhaften Unendlichkeit in Hegels „Wissenschaft der Logik“

Kiichiro TAKEMURA

Der vorliegende Aufsatz bezweckt die philosophische Bedeutung von Hegels Begriff der wahrhaften Unendlichkeit, zurückgehend auf die Dimension der Naturphilosophie, zu erhellen. Denn Schelling versichert, daß Hegels Logik nur eine Formalisierung des materiellen Gehalts seiner Naturphilosophie ist, und indem man oft diese Versicherung aufnimmt, hat man die Eigentümlichkeiten in Hegels Logik übersehen.

Fragen wir zuerst nach Hegels Lehre von Qualität, da sein Begriff der Unendlichkeit darin behandelt wird, begreift er die Beziehung der Qualität auf die Quantität wie folgt: „Die Qualität ist die erste, unmittelbare Bestimmtheit, die Quantität ist die Bestimmtheit, die dem Sein gleichgültig geworden [ist].“ Es ist klar, daß Hegel der Quantität die Qualität vorzieht, indem er diese als die erste, unmittelbare Bestimmtheit bestimmt. Hegel bestimmt ferner die Qualität wie folgt: „Die Qualität ... ist die bestimmte Natur von Etwas, nicht als eine in sich ruhende, sondern sofern es zugleich eine durch die Beziehung auf Anderes sich bestimmende Weise an ihm hat.“ Es ist kennzeichnend für Hegel, eine Qualität in Beziehung auf Anderes auffassen zu wollen.

Untersuchen wir dann Hegels Auffassungsweise von Unendlichkeit, begreift er die Veränderung des Endlichen durch die Paarbegriff von Schranke und Sollen, und er bestimmt dieselbe als Hinausgehen des Endlichen über sich selbst. Er sagt daher wie folgt. „Die Endlichkeit ist nur als Hinausgehen über sich; es ist also in ihr die Unendlichkeit, das Andre ihrer selbst enthalten.“ Auf diese Art nimmt Hegel die wahrhafte Unendlichkeit als Negation der Negation der Endlichkeit, indem er die Endlichkeit in der schlechten Unendlichkeit, welche sich der Endlichkeit entgegensetzt, findet.

Nun ist nicht überzusehen, daß Hegels Begriff der wahrhaften Unendlichkeit aus seiner Raum - Zeit - Auffassung entspringt, was Seine Jenenser Naturphilosophie bezeugt. Darin beweist er, daß der Raum derselbe bleibt, während er drei Dimensionen von Punkt, Linie und Fläche hat, und daß die Zeit, während sie drei Dimensionen von Gegenwart, Zukunft und Vergangenheit hat, dieselbe bleibt.

Was Hegels Raum - Zeit - Auffassung selbst betrifft, liegt ihr Eigentümlichkeit darin, daß Raum und Zeit nicht bloße subjektive Formen wie in Kant, sondern etwas Reales als solches sind, und daß sie füreinander untrennlich sind.

Obige Streitpunkte sind ganz anders als Schellings.